

第 67 回 近 畿 地 区 卒 業 設 計 コ ン ク ー ル 応 募 作 品 一 覧

平成 2 5 年 4 月 1 1 日

日本建築学会近畿支部

《 短 大 ・ 高 専 ・ 専 修 学 校 の 部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面 枚数
1	be connected 人と人がつながるコンレクティブハウス	澁田 絢霞	中央工学校OSAKA 建築学科	19
②	まちきち —「スケール」でつながるわたしとけんちく—	豊島有美香	大阪工業技術専門学校 インテリアデザイン学科	22
3	COLOR CUBE	朝倉 崇平	修成建築専門学校 建築学科	6
4	まちのえき	丸毛 遼	明石工業高等専門学校 建築学科	6
⑤	New Town Lifehack ニュータウンライフハック@西神ニュータウン	菅野 勝友	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	10
6	海に浮かぶ音楽空間	山城 溪	中央工学校OSAKA 空間CGデザイン科	5
⑦	未来の記憶 —気仙沼市立大島小学校立替計画—	昆野 哲	京都建築大学校 建築学科	8
8	精華ガクブツカン	HUGO FROMELL	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	14
9	北アルプス山岳事故者の為の慰霊公園整備 計画	平栗 京磨	京都建築大学校 建築学科	5
10	「里と海の箱と棚」	平岡美由紀	明石工業高等専門学校 建築学科	6
11	MY FASHION STORE	長谷川貴一	中央工学校OSAKA インテリアデザイン学科	4
12	地域を誇るといふこと	増金 毅彦	京都建築専門学校 建築科二部	3
13	MUSEO DELLA SETA ～シルク産業の復活によせて～	島多 由実	中央工学校OSAKA 空間CGデザイン科	5

(受付順) 以上 1 3 点 < N o . 欄に○印のものは入選作品 >

《 工 業 高 校 建 築 科 の 部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面 枚数
1	Sports institution	大塚 悠平	大阪市立都島工業高等学校 建築科	6
2	新たなる南港の顔 ～インテックス大阪建て替え案～	船江香穂里	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6
③	HEXAGON	森藤 大貴	大阪市立都島工業高等学校 建築科	10
4	With a Little Help from My Friends	南野真有美	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4

(受付順) 以上 4 点 < N o . 欄に○印のものは入選作品 >

日本建築学会近畿支部

平成24年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校

卒業設計コンクール（第67回）審査報告

審査員長 朽木 順綱

平成25年4月11日（木） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選）	朽木 順綱
審査員	岩田 章吾・小池志保子・佐野こずえ・槻橋 修・ 西濱 浩次・前田 茂樹 (50音順)
応募作品	短大・高専・専修学校の部13点、 工業高校の部4点 (別紙参照)

審査経過と審査講評

審査に先立ち、本コンクールの主旨と審査に関する内規、および昨年度の実績と本年度の応募状況を確認のうえ、審査会に出席した5名の委員の互選による審査委員長の決定をおこなった。審査員7名のうち当日欠席となった2名については、事前に審査済みの1名分の投票を審査会での記名投票の集計に加え、またもう1名は審査会での審査結果を事後に承認することにより、それぞれ参加することとした。

審査は、まず各審査員が全応募作を入念に閲覧したのち、入選作品として選出するにふさわしい作品数を内規に基づきつつ審議した。結果、応募総数にかんがみ、「短大・高専・専修学校の部」では応募13作品から3作品、「工業高校の部」では応募4作品から1作品を選んで各審査員が投票し、その後の審議をふまえて各部それぞれ同作品数を入選作品として選出することで賛同を得た。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では4票を得たものが3作品あり、以下、3票、2票、1票を得たものがそれぞれ1作品あった。票数に大きな開きが見られないため、協議の結果、得票した作品を対象として第2次投票を行うこととした。ただし、得票数が2票以下であった作品No.6、No.10について、前者はコンバージョン対象を選定する際の着想に優れ、現在の問題意識に基づいている点が評価できるものの、計画内容そのものが建築空間としての提案性に乏しく、図面表現にもやや拙さが見られること、また、後者は計画対象となる地域の声を丁寧に拾い上げ、図面の表現力も豊かであるが、地域特性や地形との調和において説得力が弱く、計画内容が視覚的な展示施設に偏っていることが、それぞれの解決できていない課題として残るため、この時点でともに選外とした。よって3票以上を得た4作品を第2次投票の対象とし、各審査員が2票ずつを投じることとした。なお、事前投票の内容は第1次投票にのみ反映させることとし、以降の審査は出席5名による投票によるものとした。

第2次投票の結果、4票、3票、2票、1票を得た作品がそれぞれ1作品となり、各作品について全審査員の意見を交換しあうとともに、2票以下の得票となった作品No.2とNo.9について、いずれを入選とするかについて慎重な議論を行った。No.2は自らの身体感覚をさまざまな場面で具体的に経験することを通して、細やかなヒューマン・スケールに満ちた建築空間が計画されているが、その立脚点がやや私的で閉鎖的であることを疑問視する意見が挙がり、またNo.9は社会的な問題意識に基づき、慰霊碑としての記念性と避難所としての機能性とを融合させようとする意欲作であるものの、形態の妥当性や図面表記の適正さに欠ける点が指摘された。いずれも表現力に富む良作であり、選択は難渋を極めたが、建築設計に伴う企画、調査、分析、意匠の全般にわたってバランスのとれたNo.2を入選とすることで合意を得た。結果として、これに3票以上を得た作品No.5、No.7の2作品を合わせることで、入選作品3点が決定した。

一方、「工業高校の部」の投票の結果は、作品No.3が5票を得たほか、1票を得た作品が1点であった。投票後、これら2作品についての審議にあたり、後者の1票を投じた審査員からNo.3との評価がほぼ互角であったとの意見が述べられるとともに、全審査員が改めてこれら2作品について意見交換を行った結果、No.3を入選作とすることで評価が一致するに至った。

入選作品の講評は各選評にゆずることとし、最後に、コンクール全体の概観として、応募総数の推移について触れておきたい。「短大・高専・専修学校の部」では応募総数が一昨年度の5作品、昨年度の11点から、今年度は13点へとさらに増加しており、評価の多様性が広がり、新たな建築の可能性が開かれる期待へとつながる推移であった。しかし一方、「工業高校の部」は前回から半数以下に減少したことが懸念される。本コンクールの目的である「学生、生徒の設計技術の向上」のためには、まずはできるだけ多くの作品が評価の機会を得るとともに、入選作品の審査においても様々な観点が幅広く提示され、白熱した討論を喚起することが望ましい。応募作品の増加は、学生、生徒の設計へ向けた意欲を高め、未来の設計技術者を汎く奨励するだけでなく、建築設計に関わる議論をますます活性化するうえでも、引き続き必須の努力課題といえよう。

(朽木)

まちきち —「スケール」でつながるわたしとけんちく—

豊島 有美香君 (大阪工業技術専門学校)

誰しも子供のころ自分だけの隠れ家を見つけ、そこで心地良い空間の経験したことがあるだろう。このような街の中にある秘密基地をキーワードとして、住宅を作るアプローチとしている。機能性や合理性から空間を形式的に構築するのではなく、心地よい居場所を感性的に見つけ、それを住宅の中に再現する試みである。

まず街の構成要素から、自分の身体スケールに合う心地よい場所を見つけ数値化してみる。一般的に邪魔とされる障害物までもその効用を再確認し、通常の規範とされるスケールを自分なりの価値観で問い直す。空間を広さで規定するのではなく、そこでの行為や心地よさで決定するのである。またスケールや素材を周辺環境に合わせることで、街とつなげて場を拡張させることにより感覚的に狭さを補う。

緩やかな階段を上下に散歩するように、自分の居場所を探す。家をつくるというよりも、小さな街をつくり、そこに様々な居場所を設ける試みであり、彼女なりの建築への向き合い方のシミュレーションとも言えよう。

思考のストーリー性が明確で、プレゼンテーションもシンプルに可愛くまとめられている。今後はさらに、自らのオリジナルな空間提案へと展開させることを期待する。

(西濱)

New Town Lifehack ニュータウンライフハック@西神ニュータウン

菅野 勝友君 (大阪工業技術専門学校)

開発から30年以上が経過したニュータウンを題材として、日常的なコミュニケーションを可能にする空間構成の提案を行っている。題名の「Lifehack」にも込められているように、まちの空間構成の提案を建替え・改築の際に一軒からでもできる工夫に落とし込んでいく所に好感が持てる。内容としては、文献・ヒアリング調査を整理した結果を1/20の模型で検証し、さらに実際の敷地を使って1/1のスタディを行って、机上の空論ではない実感を伴った検討がなされている。疑問から検討、提案に至るプロセスをわかりやすく表現されており、高さの検討を行うに当たって、下から積み上げていくのではなく、高い塀を少しずつ壊していくことによって、高さを検討している点が面白い。

惜しむらくは、そこに至る過程は地に足のついた検討であっただけに、最終的なアウトプットとしての改修案が、コミュニケーション誘発要素の組合せだけでない魅力的なまでに昇華できなかった点である。

(佐野)

東北の気仙沼に浮かぶ大島を敷地とし、津波からの避難場所まで、その経路をなぞるように小学校が計画されている。避難経路そのもので小学校を包み込むような計画といえる。気仙沼大島は東北最大級の島で、東日本大震災では地震と津波に加えて火災にも襲われている。今も震災の爪痕が残る敷地にどのような建築が相応しいのか、あるいは、小学校をつくる場所としてこの敷地が相応しいのかなど、検討する課題が多くある場所である。建築を計画すること自体を躊躇してしまいたくなる。しかし、この作品は「未来の記憶」と名付けられている通り、震災と津波の記憶を内包しながら、避難経路と斜面地を小学校の機能の中に取り込んでいる。教室の合間を縫うようにスロープ状の廊下がつくられ、そこがこの地域の避難経路ともなる。日常と避難という行為を融合させるような計画で、その屋根の上には緑が広がり、子どもの背丈の成長と斜面の高低差が呼応するような断面計画となっている。そこには、避難経路とともに暮らそうという決意が満ちているように思える。決意と言っても、こども、明日、希望といったフレーズに彩られた前向きな提案である。

(小池)

HEXAGON

森藤 大貴君 (大阪市立都島工業高等学校)

この作品は、幼稚園や保育園のプロトタイプとして、廊下と部屋という単位ではなく、正六角形平面モジュールを用い、内外をゆるやかに連続した空間として提案している。正六角形平面の空間の連続は、正方形平面の空間のそれに比較すると、建物というよりも大きな遊具空間や、小さな住居による集落のようにも捉えられ、幼児の空間把握は大人のそれとは違うが、少なくとも空間に包まれている感覚を呼び起こすのではないかと。全体の形態ありきではなく、幼児の内部空間の認識をもとに、部分から全体を構築しようとする設計の姿勢が評価された。ただ、正六角形モジュールを一房 60 m²程度とした事については、子供の身体寸法に対して、まだスタディを重ねる余地がある。また、プロトタイプではあるが敷地を設定しているので、その敷地環境の持つスケールをいかに建物全体のスケールに落とし込んだかが、図面の中では表現しきれていないことが惜まれる。

(前田)